

学生ボランティアの活用による公立小学校の実践づくり

新井孝喜*・金子 清**・入江宣文***・小野瀬善行****・中原正人****
柏 佑美*****・飯村大輔*****・石川雄士*****

（2000年10月4日受理）

A Case Study of Undergraduate and Graduate Students' Volunteer Experience in an Elementary School

Takayoshi ARAI*, Kiyoshi KANEKO**, Norifumi IRIE***, Yoshiyuki ONOSE****,
Masato NAKAHARA*****, Yumi KASHIWA*****, Daisuke IMURA***** and Takeshi ISHIKAWA*****

(Received October 4, 2000)

はじめに

これまで筆者らは、教員養成の改善を図るために、①附属学校園・公立学校の研究とタイアップした実践研究のゼミナール・講義へのフィードバック、②学校での教育実践に直接参加する「学生ボランティア」の派遣、③連絡用ホームページの作成・運用と実践ビデオの撮影・編集、等を行ってきた。

①は、大学の研究機能を地域の学校教育の改善に活かすと同時に、その最新の研究成果を教師教育の内容として取り入れていくことである。これには、修士論文や卒業論文のテーマ・方法、あるいはゼミナールでの共同研究として、直接に学校での実践研究を取り入れる場合と、大人数を対象とする講義で、実践の様子を紹介、検討する場合とがある。前者は、研究者としての大学教員ばかりではなく、大学院生・学部生の研究・教育が、学校での実践開発に寄与することになり、後者は、これらの研究成果を講義で扱うことで教師教育に最新の研究動向を反映させることになる¹⁾。また、これらの過程で関係者を大学に講師として招き、教育実践の実際を提示することも継続して試みてきた²⁾。

②は、参加する学校の研究の一環として、あるいは日常の実践の充実・改善のために行われてきたものであり、附属学校園をはじめ、茨城県内の公立小・中学校十数校で、5年にわたって継続して

*茨城大学教育学部(310-8512 水戸市文京2-1-1, Faculty of Education, Ibaraki University)

**ひたちなか市立平磯小学校(Hiraiso Elementary School)

***茨城県立水戸南高校(Mito Minami High School)

****茨城大学大学院教育学研究科(Graduate Student, Ibaraki University)

*****茨城大学教育学部学校教育教員養成課程(Ibaraki University)

いる。また、教員養成としての「学生ボランティア」の位置づけは、教員養成学部「フレンドシップ事業」の一環として考えることもでき、公立学校での事例として紹介・検討を行ってきた³⁾。

そして、③は、大学での教育・研究環境の改善を伴いながら、特定のコース（選修）や所属研究室を越えた学生の情報交換、連携を可能とし、加えて教員養成として求められる情報リテラシーの育成にもつながっている⁴⁾。さらに、その成果は、大学の学生支援の場面でも、単にゼミナールや講義の改善ばかりではなく、「教育学部紹介ビデオ」の撮影・編集として結実し、オープンキャンパスや入学時のオリエンテーションで活用されている⁵⁾。

以上の①から③の活動は、大学改革、とりわけ平成11年度から適用の新教育職員免許法に対応した教育学部のカリキュラム改革と連動したものである。教育学部の地域への貢献並びに学部・附属の連携と、体験学習・情報教育の重視による今日的に要請される教員養成のあり方を模索してきたものであり、地域の教育実践の改善と連動した教員養成改革に一定の成果をあげてきた⁶⁾。

以下本稿では、こうした活動の一つの到達点として、2000年6月に行われた公立小学校での学生ボランティアの活用による実践を取り上げ、その総括を試みたい。

1. 学生ボランティア活動の全体像

ここでは、学生ボランティアの組織概要とこれまでの活動について明らかにしたい。まず学生ボランティアに参加した学生の所属の推移、そして学生ボランティアの活動情報への参加学生のアクセス方法などの変遷から、学生ボランティアの活動を三期に分け、考察を進めていきたい。

第一期として位置づけられるのは、1996年度後半から1997年度までの期間である。参加学生は、茨城大学教育学部小学校教員養成課程教育学選修及び学校教員養成課程教育科学コース（平成8年度の学部改編に伴い「教育学選修」が「教育科学コース」と改められ、その後「教育科学系教育基礎選修」に再編された）の学生、とりわけ教育方法学研究室（通称・新井ゼミ、卒論・修論指導ゼミおよび大学院「教授学演習」、学部「学習指導演習」の履修者）に所属する学生であった。

学生ボランティアはゼミナールの活動の一環として行われ、そこに所属している学生の中で希望者が特定の研究協力校に出かけてボランティアとして活動を行っていた。学生は担当教官との日常的な接触を通じて、学生ボランティアへの参加の情報を得ていた。当時は、常陸太田市立佐竹小学校など、大学教官や研究室所属の学生・大学院生と共同研究に取り組んでいる研究協力校が、学生ボランティアの主な舞台となった。

この時期の学生ボランティアの主要な活動は、チームティーチングにおける授業の補助である。研究協力校の教諭が授業全体の進行を司り、ボランティア学生は授業中の子ども個々の活動やグループごとの活動をより細やかにサポートした。例えば、社会科における「地域ごとの暮らし」の授業に、それぞれ出身地に地理的特徴のある学生が参加して、自らの体験談などを子どもたちに話したりした。具体的には山形県出身の学生が「雪国」の生活の話すなどである。また算数の時間においては、九九の計算、コンパスや三角定規の使い方を練習する活動の際に子どもたちへの習熟度に応じた個別的な学習を学生がサポートした。生活科では、秋の草花を使って様々な「もの作り」をする際に、「遊ぶもの」・「楽器」・「かざり」・「ファッション」などに分けられたグループに学生が入り、

子どもたちの活動のサポートにあたった。さらに学校外で行われる活動でも、学校から目的地までの移動や目的地での活動中における安全確保などの面で学生が位置づくこともあった。これらの活動は、その規模と期間から見て「単発型」ともいえる形態に特徴がある。

第二期は、1998年度から1999年度初頭である。学生ボランティア活動の内容が、それまで参加してきた学生の個人的な友人関係、そしてその他の講義受講者などの間に浸透を見せるようになった。その結果、小学校教員養成課程教育学選修・新井ゼミの学生に限らず、ボランティアへの参加学生の幅が広まってきた。また、学生ボランティアを受け入れる研究協力校も、上述の佐竹小学校に加えて、ひたちなか市立大島中学校、水戸市立第一中学校、牛久市立向日台小学校などに拡大していく。

活動内容は、佐竹小学校においては、算数や生活科などの授業補助、宿泊学習などの特別活動への補助的参加が引き続き行われる中で、大島中学校などでは、社会科において一単元を継続的に参加し、子どもたちのテーマ別学習をサポートするボランティアの形態が見られるようになる。具体的には、社会科地理分野の「中国・四国地方」の学習において「気候」・「工業」・「農業」・「伝統工業」などのグループに分かれて子ども達が学習を進める際に、資料の選定やまとめ方、発表の方法などの生徒の個別的なサポートを担当した。

これらの活動に加え、グループごとの「まとめプリント」類の作成を行うこともあった。こうした活動を発展させて、大島中学校においては、教科や単元に縛られることなく、ある程度の長期間に渡って、学生がボランティアとして学校生活全体に参加する活動なども行われた。夏季や春季の長期休暇を利用して、1～3週間に渡って実際に学校生活に入り込み、チームティーチングの授業補助や授業内容の確認プリント作成などを行うことが内容である。これらの活動は、前述した「単発型」に比して、その規模や期間からも「中期型」と位置づけられる。

さらに、この時期においては、宿泊学習や文化祭など特別活動への学生ボランティアの参加も見られるようになる。例えば宿泊学習においては、学生が初日のウォークラリーや飯盒炊きさん、夜のキャンプファイヤーまで参加し、率先して、キャンプファイヤーでギターが得意な者が歌を披露したり、余興を盛り上げたりなど、子どもたちとより深い交流を図ることができた。またそこでは、生活科と同様、子どもたちの安全面へのサポートも学生たちの主要な活動となっていた。文化祭で、保護者とともに学生が「焼きそば」や「焼き鳥」などの出店の運営に参加したり、生徒達の企画に学生が参加することもあった。

一方で、弁護士団体との協力により水戸地方裁判所で民事裁判の傍聴に生徒たちと付き添うなどユニークな活動も試みられた。こうした特別活動への支援を通して、間接的ながらも学校・学生・保護者をはじめとした地域との協力の下におけるボランティアのあり方が模索された。また、子どもたちの学習面では、従来の教科の枠を越えた「総合的な学習の時間」につながる活動への、学生のボランティアとしての参加の可能性が看取できよう。

一方、学生ボランティアの活動の拡大に伴い、とりわけボランティアへ参加する学生間の情報の伝達などの面において課題が生じてきた。学生ボランティアは、自主的な参加を前提とする活動であるため、参加学生個々の時間的制約などの理由により、参加への準備段階における打ち合わせや事後の反省・次回への申し送りなどまで組織的な取り組みを行うことに必然的な困難が伴っていた。ボランティアへの参加学生側の問題への支援として、ホームページ（以下、HP）を利用した学生ボランティアの支援システムの開発が模索されたのもこの時期である。具体的には、HPを大学内のサー

バーに開設し、情報の性質に応じた開放性や機密性に留意しながら、学生ボランティアに関する情報（活動の期日や内容など）のブリーフィングを行ったり、HP上に「伝言板」を設置して参加学生間で時間に制約されない情報交換が行えるよう情報の双方向性の確立が模索されたりした。

それまでも教育学教室のHPとして作成された新井研究室の個人HPでも実践や共同研究の様子は紹介されていたが、さらに組織的に様々な情報を掲載することを意識し、このHPでは、これまでの学生ボランティアの活動を紹介するなど、新たな参加者を募るための広報的側面も重視した。なお、この時点では大学のゼミナールの一環としての「新井ゼミ」参加者の枠を越えて活動が広がっており、さらに自由な参加者を募り、学部横断的なプロジェクト型の研究可能にするために、「茨城大学教育実践研究会」を立ち上げ、このHPでもその名称を正式に用いた。

第三期は1999年度から今日までである。ボランティアへの参加学生の所属は、さらに広範になり、必ずしも茨城大学の学生に留まらなくなってきた。また大学教官を介さずに、直接に研究協力校側と学生間で連絡を取り合い、事前の準備から当日の活動までの計画を立案・遂行するケースが増えてきた。これらの学生間の打ち合わせにおいては、前述のHPなどの利用もかなり活発になり、学生間の自主的な学生ボランティア運営の体制ができあがりつつあった。

特に、このような学生ボランティア運営の体制の確立に伴い、研究協力校につき一人の学生が責任者となって学校との諸連絡の窓口となったり、参加する学生間の諸々の調整を行うようになったりしたことは、数多くの学校での円滑な活動の準備を可能とした。責任者となった学生は、当日参加する学生を研究協力校に通知したり、事前の打ち合わせなどが必要な場合などは、HPの伝言板や電子メールなどを利用して連絡事項を参加学生間に伝えたり、直接ミーティングを開いたりなどで、当日のボランティア活動に備えている。

またこの時期を特徴づける活動として、障害や病気などの理由から学校での日常生活を送るために特別の支援が必要とされる子どもに長期間に渡って付き添う活動が行われるようになったことがある。具体的には、通常の学級で生活する障害児への支援や障害児学級でのボランティアなどがあり、特別教室や体育館への移動などに付き添ったり、日常的な実践の補完を行ってきた。これらの活動は、いわば「長期型」であり、年度を通しての継続的なボランティアとしての活動となる。

以上、学生ボランティアの組織概要とこれまでの活動の特徴について述べてきた。続いて、茨城大学教育実践研究会の活動として学生ボランティアと並んで重視されてきた「ビデオの撮影・編集」面での活動についても変遷と位置づけを明らかにしておきたい。これらの諸活動もまた、本研究において取り上げる実践に大きくつながっているからである。

上述した第一期から第二期において「ビデオの撮影・編集」は、学生ボランティアの「記録」としての性格が強かった。小学校における「単発型」の生活科や算数におけるボランティアの活動をまとめるために、「秋をつかってあそぼう」や「水族館をつくろう」、「二等辺三角形をかこう」等のチームティーチングの名を冠した5分から10分の記録映像を制作することから活動が始まった。その後、比較的長期にわたる「中期型」のボランティア活動において、ボランティア期間中に撮影担当の学生も研究協力校に出向き、実践の模様をビデオに撮影し、記録を作成した。またある学生は、自らの教育実習にビデオ機材を持ち込み、日々の実習や子どもたちとの交流の様子を記録した。これらの記録映像は、研究協力校における発表会などでも度々紹介され、また教育実習の記録映像をまとめたものは教育学部の教育実習の事前指導などで「教育実習紹介ビデオ」として使用されるこ

ともなった。

そして、ボランティアとして参加するティームティーチングの教育実践に留まらずに、より広範な「教材研究」を意図した作品づくりも試みられた。地元の林業組合や醤油メーカーへの取材を基にした「教材用」としてビデオや、また講義（「生活科内容研究」）の一環で、茨城大学周辺の学生食堂を取材した『生活科マップ』も作成された。

当初は、撮影のための記録メディアがアナログ方式のHi8であり、編集もビデオデッキを2台以上用意して、取材テープから主要な場面を他のテープに録画するという作業であったため、画質の劣化が避けられなかった。その後、デジタル方式でノンリニア編集が可能となり、あわせて撮影・編集に携わる学生の技術的向上もあって、その後の作品の質は徐々に向上していった。

これらの活動は、先述したHPの運用とあわせて「教員養成系大学・学部における情報教育」として位置づけることが可能である。茨城大学教育実践研究会における学生ボランティアの変遷と密接にリンクする関係で、教育実践に密着した有機的な情報教育を組織的に行う試みが行われていたといえる。

2. ひたちなか市立平磯小学校における実践（宿泊学習の支援－事前準備）

①準備段階での学生ボランティア

今回の宿泊学習にあたっては、宿泊学習の当日に至るまでに、事前のボランティアとして、学生が直接平磯小学校に向かい、子どもたちとともに計画を立てたり、カレー作りの練習をしたりといった宿泊学習の準備を行った。事前準備のボランティアは5回にわたったが、初回の活動では、宿泊学習に直接関係する活動はなく、学生は教科の授業の中に、アシスタントティーチャーとして入った。1日を通してふれあう中で、子どもたちとボランティアの学生がコミュニケーションをとり、互いに慣れるといったことが中心となった。

そして、2回目以降の活動で、一班5～6人に対して学生一人が付き、個別に支援するスタイルとなり、ボランティアの学生を含む班で、宿泊学習当日まで主な活動を行った。班活動では、宿泊先である水戸少年自然の家までの現地集合の計画を班ごとに立てることが中心となり、電車やバスといった交通機関の連絡状況や、途中で見学する施設の検討、また、それらにかかる費用の調査などを行った。見学先を決定するにあたって、子どもたちには、あまり水戸の土地勘がないため、自分たちの行きたいところが実際に行くことが可能な場所なのか、また、バス会社やそのルートがわからないといったことが問題となった。ボランティアのアドバイスは、特にそのような場合に必要となった。

実際の活動場面では、バスの連絡を調べるため、知りたいことをノートにまとめ、ボランティアの学生が、バス会社の人になりきって電話のリハーサルまで行い、実際にバス会社に電話をすることもある。しかし、自分が予想していない言葉が出てきたり、相手の言っていることが理解できなかつたりすると、学生に受話器を渡そうとする子どももいた。「大人の立場」で考えれば代わってしまうことは簡単であろうが、あえて代わらず傍らで励ますと、子どもたちは何とか自分達で最後まで話を終え、手に汗をかきながら受話器を置き、ほっとしたような満足げな表情を見せた。

学生ボランティアによる支援の有効性は、このようなところにあるのかもしれない。

事前のボランティアの中で感じたことや、注目すべきこと、子どもたちとの関わりの中で悩んだことなどについては、一日のボランティア終了後に行われる教員を交えた反省会や、大学での学生間のミーティングで話し合われた。また、直接の話し合いに加えて、ボランティア参加者各人が感じたことや、不安に思っていることをメンバーが共有するために、また、他のメンバーへの連絡の手段として、HPが役立った。通常は「お知らせ」のみに終わりがちな掲示板での書き込みであるが、今回の活動では特に頻繁に経過報告や相談が行われ、進行をスムーズにした。

②学生の問題意識

今回のボランティア参加学生の中には、平磯小学校での活動は初めての学生もあり、子どもたちとの面識がないため、班活動での交流に、初めはぎこちなさが見受けられることもあった。しかし、ボランティアの回を重ね、体育の授業や休み時間に一緒に身体を動かしたり、話をしながら給食を食べたりするなかで、子どもたちと学生の関わりも自然なものとなっていった。宿泊学習当日までには、両者共に名前や顔もしっかり覚えられ、学生も子どもたちにとって十分に頼れる存在になっていたようである。

このような状況の中で学生の中には、別の問題意識も生まれてきた。子どもたちに頼られる存在になったものの、その反面で、頼られるままに支援してしまうと子どもたちの自主的な活動を妨げたり、子どもたちが失敗して自分で解決策を見出すという学びの機会を奪ってしまったりするのではないかということを感じた者もいたのである。自分はどこまで、手を出していいのかという迷いが生じた。そのように考えて、突き放しすぎても、せっかく築かれつつある子どもたちとの信頼関係はどうなるのだろうかといった不安もあった。これは、どのようなボランティアに参加していても、常に考え、悩むところであろうが、今回のボランティアでは、事前の大学での打合せや、宿泊学習中にも、学生間で何度も取り上げられ、議論となった。

その結果、反省会は、各々が自分の動きや支援のあり方を振り返る機会となり、次に子どもたちと接するときには、時には葛藤し、悩みながらも最善の方法を見つけようとする姿勢を持てたようである。実際に教師になったときにも、自分がどこまで手を出して、どれくらい見守るのかという問題は、子どもの成長を支援する上で重要なラインであるということに、学生たちが気づき、活動の中で模索することができたということは、大きな収穫であったと考えられる。

具体的な場面としては、ある班が、水戸駅に着いた時、自分たちが乗るバス乗り場のある北口ではなく、南口の方に歩き出したことがある。ボランティアの学生は、当然間違いに気づいたが、あえて子どもたちに続いて南口まで行った。南口まで行き、バス停がないことを確認して、子どもたちは逆だったことを納得し北口に向かった。大幅に時間をロスしたものの、自分の目で見て、自分たちの力で間違いに気づくという経験をすることができた。一方で、学生は、先に述べた問題意識がなければ、「ちょっと待って」と声をかけていたと思われる。そこで黙って見守ることができたのは、一連の活動を通して獲得された学生の姿勢であろう。

今回のボランティアでは、宿泊学習当日だけでなく、事前の準備段階から学生が関わったことにより、子どもたちと学生の関係も良好に築かれ、宿泊学習終了後の子どもたちの感想文の中からも、ボランティアの学生がいたことに対する感想が多く見られた。学生の側も、余裕を持って、子どもたちをじっくり見るすることができた。また、ボランティアがあるからそれに受動的に参加するのでは

なく、各々が問題意識を持つところまで話し合ったから、子どもたちの支援に取り組むことが可能となり、学生側の成長にもつながったのではないと思われる。

③実践のスタート

平磯小学校からボランティアの依頼があった後、学生の代表者が、ボランティアとして必要な学生の人数、学生のおおまかな活動の内容などを含め、実践の全容について担当教諭等と話し合い、それに基づいて、メンバーを募集した。その後、学校側との話し合いを経て、宿泊学習当日までに、上述の通り、事前の準備段階でボランティアの機会を5回設けることが決定した。これを受けて、大学に参加するメンバーが集まり、ミーティングが行われた。第1回目のミーティングでは、代表者が学校との打ち合わせで得た情報から、今回の活動の内容が確認され、事前ボランティアの日程調整など話し合いが持たれた。ここで特に強調されたことは、「情報の共有」ということであった。5回の事前ボランティアに毎回全員が参加することは不可能なので、互いにフォローしあうためにも情報の共有は重要なことであった。実際、今回の活動では、教育実践研究会のHPにある伝言板への書き込みによって、ミーティングの召集や、ボランティアの活動報告、進行状況の伝達などがなされた。

3. ひたちなか市立平磯小学校における実践（宿泊学習の支援―当日）

前述の通り、ひたちなか市立平磯小学校での学生ボランティアの活動は、1999年から行われてきたので、2000年6月下旬に宿泊を共にした第5学年とは、4年生のときから一緒に学習してきた経験があった。これまでに「いのちの学習」をはじめ、体育、算数、社会の授業など、学生ボランティアの活動としても、比較的長期間に及ぶものである。

教科の学習をはじめとして、休み時間や放課後も子どもたちと接してきたことで、彼らにとって学生の存在は、年齢の離れた兄妹のようになりつつある。本年度（2000年度）は、お互いに顔も名前も覚えた2年目であり、学生が単なる遊び相手としてばかりではなく、共に学ぶ助言者としても参加できる時機であるとの判断から、本年度の宿泊学習への学生ボランティア導入が決定された。以下、宿泊学習での学生ボランティアの活動内容について、当日のスケジュールに沿いながらまとめてみたい。

今回のプログラムは、宿泊場所となる水戸市少年自然の家（水戸市全隈）への現地集合から始まった。5～6名で1グループとなり、それぞれが自然の家を目指したが、それぞれのルートは十班十色であり、平磯小学校の教員数名では把握しきれないほど市内の広範に及んだ。だが、各班に学生が配されたことによって、また撮影を担当する学生も含めて全員が携帯電話を所持したことによって、班の動向を密にチェックでき、保護者から学校への問い合わせにも対応しうる情報を提供できた（なお、学生の持つ電話番号は、班の子どもたちにも知らせてあったが、緊急には使用されなかった。しかしながら、電話番号のメモは子どもたちにはかなり心強かったようである）。

この現地集合に関しては、そのルートを決める際、大きく二つのルールがあった。一つは、公共機関を使うこと。つまり自家用車使用の禁止である。二つ目は、自然の家に着く前にどこか「寄り道」をすることであった。集合時間は午後1時に設定されたが、高学年とはいえ、小学生にとって生活圏を離れている水戸は、実感を持って行動計画を立てるには「遠い」場所であり、当初は無理な

計画が見られた。そのため、既述のように事前の準備段階から各班を学生が担当し、プランの検証役、支援役を担った。

平磯小学校から自然の家へは、いくつかのルートが考えられた。まず、学校近くの停留所から路線バスで水戸市内に向かう経路がある。あるいは、徒歩で数分の距離にある茨城交通湊線の平磯駅まで行き、勝田駅でJR常磐線に乗り換え、自然の家行きの路線バスが出ている水戸駅か赤塚駅まで行く経路もある。

多くの班は、水戸駅・勝田駅からのバスは運行本数が少ないこともあって、自然の家の手前にある病院へ向かうバスを利用することになった。しかし、この病院から集合場所へは、1時間ほど歩くことになる。途中、常磐自動車道を跨ぐ道程であり、高速道路側道の通行禁止のみを確認し、歩道も地図を基に子どもたちが決めた。準備段階で「住宅地図」を持参した子どもたちがおり、「○○さん家のところをまっすぐ」、「△△コンビニがあったら曲がる」など自分たちなりにルートを設けていた。

子どもたちと学生との待ち合わせ場所は、どの班も水戸市内とした。これは、教育的な配慮としては、子どもたちが電車に乗って水戸まで行くという「冒険」を邪魔しないためであったが、その一方で、学生の立場では、早朝に平磯まで出向かずに、無理なく行程に参加できたことも意味する。このように、学生側の負担を軽減し、参加しやすい環境を整えることも、「事前指導から当日の活動まで同じ顔ぶれで十数名」というボランティアの確保を可能とした条件の一つであることは確認しておきたい。あくまでも自発的な参加を前提とするボランティアだからこそ、実りある活動を継続させるためには、「無理なく、負担感なく、自然な」参加が必要なのである。

合流後は、それぞれの班が見学場所に向かった。ある班は、茨城県庁にまで足を伸ばしたが、水戸駅及び赤塚駅から県庁行きの直通バスと自然の家行きバスとの連絡を考えると、見学時間を設定するのは難しかったようである。水戸芸術館を楽しんだ班もある。この班では、子どもたち自ら事前に予約を入れて、自分たちが見学に許される時間を伝えておいたため、通常の見学コースをより凝縮した特別ツアーを学芸員の方が組んで下さった。また、菓子工場を訪れ、来館記念のチョコレートを手にした班もあった。そして、市内の公園で遊ぶ予定を立てていた班がいくつかあったが、あいにくの天候で雨足が速まったため、途中で切り上げることとなった。そのまま自然の家に向かい、相当早く着いてしまったが、施設のご厚意で体育館を開放して頂き、時間を過ごすことができた。他の班も県立歴史館、弘道館、保和苑などに「寄り道」しつつ、全ての班が集合時間までに到着することができた。

当初、子どもたちはテント泊の予定であった。事前に学校の校庭にペグを打ち、テントを張る練習を重ねてきたが、当日は雨となり、宿泊室への移動となった（とはいえ、テントに不安を抱いていたのは、子どもたちや保護者よりも学生であった。この日に先立ち、キャンプに慣れている学生が他にレクチャーし、資料も配っていた。「できない」「知らない」では済まされない「ほんもの実践」だから、協力が必要になる好例であろう）。

キャンプファイヤー後の企画は、天体観測であった。水戸市総合教育研究所のご協力で、水戸市が所有する移動天体観測車を特別にお借りする機会に恵まれたが、曇天のため、スタッフの方による天文教室が開かれた。星空こそ目に出来なかったが、初めて目にする大型の天体望遠鏡は、2学期から始まる天体の学習への導入として十分に興味を引いたようである。事実、子どもたちからのア

ンコールに応え、秋には、保護者を交えて学生ボランティアとの星空観測会が行われることも決定した。

就寝までの数十分ではあったが、ナイトハイキングとして、宿泊施設近辺を各班ごとに散策した。夜間のことであり、用水路も流れる場所なので、やはり学生も行動を共にした。小雨が交じる中、ホテルを観察できた。

通常、宿泊学習の学生ボランティアでは、夜間は解散し翌朝に再集合していたが、今回は、学生も宿泊し、教員と学生、あるいは学生同士でのミーティングの機会を設けることができた。1日目の反省を出し合い、2日目の支援に活かす上で有効であった。例えば、ある学生の「こちらが指示を出さないと、班の子どもが行動しない。しかし、今日は支持を与え過ぎた」という内省から、「子どもの主体性を尊重しよう」、「最低限のアドバイスを伝え、子どものリアクションを待とう」という支援面でのコンセプトの共有が図られた。また、別の学生が「病院から宿泊場まで1時間以上歩かせたのは、かわいそう」と口にしたのに対し、教員からは「せっかくの宿泊学習なので、甘やかさず突き放してほしい」との助言があった。ボランティア活動にあたっては、事前・事中のミーティングや、事後の報告会が持たれる。しかし、宿泊を伴う活動は、子どもたちばかりではなく、学生たちにとっても日常の話し合いとは違った意味合いを持ち、意見の交換が活発になったようである。

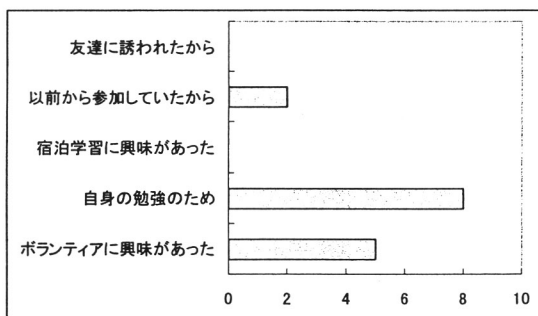
2日目は、ウォークラリーが組まれた。これまで行ってきたボランティアでのウォークラリーでは、子どもの自主性を考慮し、学生をグループに配さない学校が多い。学生の役割としては、チェックポイントでのスタンプ係や「おぼけ」に扮する場合等、行程でのチェックや準備側の支援が大半である。しかし今回は、タイムや設問への正答数を競うスタイルではなく、むしろ散歩に近い形で行われたので、前日に引き続いて学生は担当する班に入って、一緒に活動した。先からの反省に基づき、地図の見方を聞かれても、即答しない学生が多かったため、道に迷う班が続出した。教育実践の質としては、成果を確認することは難しいが、携帯電話の活躍をはじめ、ボランティアの学生にとっても、ウォークラリーそのものの得難い経験となった。

子どもたちは、手配されたバスで帰校するため、学生たちとは自然の家で別れ、これをもってボランティア活動としては全日程を終了した⁷⁾。

なお、以下に資料として、ボランティア参加学生（資料1）、宿泊学習参加児童（資料2）、そしてその保護者（資料3）への活動についての事後アンケートの結果を示しておく。

資料1：学生へのアンケート（2000年7月5日実施 対象：学生ボランティア15名）

項目1 参加したきっかけ



項目2 参加する上で気をつけたこと（自由記述）

- 交通安全
- 子どもの目線に合わせること
- 言葉遣い
- 子どもの意思を尊重する
- どこで手を出すか

項目3 どのような活動が良かったか（複数回答）

設 問	人数（名）	%
事前の調べ学習	8	53
調理実習	2	13
現地集合までの活動	12	80
飯盒炊さん	7	47
キャンプファイヤー	8	53
天文教室	1	7
ナイトハイキング	7	27
ウォークラリー	5	33

資料2：児童へのアンケート（2000年7月3日実施 対象：第5学年55名）

項目1 大学生の先生が来て楽しかったですか はい：55名 いいえ：0名

項目2 どんなことを学びましたか（複数回答）

設 問	人数（名）	%
地図の見方	29	47
電話の対応の仕方	14	25
資料の見つけ方	8	16
運賃の調べ方	11	20
時刻表の見方	21	38
計画の立て方	14	25
緊急時の対応の仕方	2	3
人に相談したり、話し合ったりして問題を解決する方法	8	16
食事の作り方、片付け方	34	62
火のつけ方	27	49
交通機関の利用の仕方	8	16

項目3 声をかけてもらったり、教えてもらったりしたことで、印象に残っていること（ことば）

はなんですか（自由記述）

- ・がんばろうね ・うまくできたね ・ゴールで会おうね
- ・みんな友達なんだから声掛け合って ・意見を言わないと何も進まないよ
- ・ありがとう ・もう少しだね ・出来るところまでやってみよう
- ・まかせたよ

資料3：保護者へのアンケート（2000年7月4日実施 対象：第5学年保護者59名）

設 問		はい	いいえ
項目1	進んで調べ学習ができた	51名	8名
項目2	準備物を自分で考えていた	50名	9名
項目3	内容についてよく話をしていた	52名	7名
項目4	帰ってきてから様子を話した	53名	7名

項目5 活動全般（準備から当日まで）について、あるいは何か変化したことについてお話し下さい。

- 下調べに当日の順路を確かめに出かけ、家族みんなで宿泊地の見学をした。積極的に取り組んでいた。（当日、それでも道に迷ってしまったようです）
- バスや電車の時間、運賃等を調べる際、親の協力が必要。中には実際に乗っていき調べた方も…。少し親の負担を感じたが親子のコミュニケーションをとる良い機会だったともいえる。
- 男の子なのであまりいろいろと話してはくれませんでした。自分なりに計画を立てていたのではないのでしょうか。私には何一つとして質問疑問など聞いたことは無かったです。
- 心配しながらも、自分で準備をして楽しそうだった。
- バス会社に電話して、時刻、運賃、バスの乗り方等を一人で聞いていたこと。
- 現地集合について友達と電話で何回も連絡を取って調べていました。現地集合に不安があったようです。
- 子どもなりにコースなどをよく考えているようでした。地図の見方を親子で考えました。
- 調べ学習は親に頼ってしまいましたので不安でした。しかし、徐々に班の友達と打ち合わせや相談していく様子が見え、当日はちょっと安心して送り出せました。
- カレー作りの練習をするため、家でカレーを作るとき、野菜切りなど進んで手伝いをしてくれました。
- 1泊2日の宿泊より、それまでの話し合い計画がとっても濃いものであったような気がします。5年生になると自分たちでこのようにできるんだと成長を感じました。

4. 実践的フィードバックとしてのビデオの撮影・編集

平磯小学校の宿泊学習においては、学生ボランティアの活動としては初めての試みとして、学生の中でビデオ制作班を編成して、学習活動の全体像が概観可能なビデオを編集した。これは、学校側にとっては廉価で質の高い記録映像を残すことになり、また、今後の実践研究のための素材の提供としての意味も持っている。ここでは、単に学校（ないしは、参加した子どもやその保護者）にとっての記録映像としての価値を超えて大学、とりわけ教育学部で学ぶ学生にとっての実践ビデオの撮影、編集の意味を考察したい。そのため以下、ビデオ制作の意義と、学生ボランティアにおいてビデオ制作を実施するにあたっての留意点、そして実際に用いられた方法について検討していく。

①実践的フィードバックとしてのビデオ制作の意義

実践研究のための素材の提供として考えるとき、学生ボランティアにおけるビデオ制作の意義は、大きく二つに分けられる。

第一に、参加者にとっての活動記録としての意義である。ボランティアに参加した学生は、撮影されたビデオを事後に視聴することによって、自らの行った活動内容を客観的に観察・評価し、次回のボランティア活動のための反省を行うことができる。これは、実践者にとっての実践的フィードバックの意味である。今回の平磯小学校での活動でいえば、事後の反省会において、活動の内容や反省点等に関する議論がビデオの視聴をきっかけに発展していく面などがあった。その点で、関係者が実践ビデオを撮影し、編集し、またこれを参加者が視聴すること自体が実践研究の重要な過程である。

通常、教育実践の記録映像は、撮影・編集のプロが、その専門性を発揮して作成することになる。これは、その「眼」によって切り取られた客観的な記録としての価値を有することになり、教育関係者の観察を補完するばかりではなく、時には新しい視点を示唆することすらある。優れた教育ドキュメンタリーが研究資料的価値を有するのはそのためであり、これは今日的なビデオ映像のみのことではなく、例えば古くは島小（斉藤喜博）の写真集⁸⁾のように、スチール写真であっても、場面の切り取りとその配置によって、きわめて豊かな実践のイメージを得ることが可能である。

また、「記念」としての意味で活動記録を残すことを考えても、当然、撮影・編集のプロによる作業は、「見栄えのよい」映像と「わかりやすい」編集がなされることになる。

しかしながら、実践記録は、映像に限らず文章の場合でも同様のことであるが、その作成過程そのものが実践者の力量を高めることになる。研究授業で授業記録を丹念に行い、授業過程の復元をすることが試みられるのは、あるいは教育実践全般で実践記録の作成とその分析が重視されるのは、そのためである。

実践を企画し、参加するところから、時間と論理を共有している学生ボランティアのビデオ制作は、学生が、まさに共同作業で実践を構築し、分析する素材を産出していると考えられる。教師になる学習を進めている途上で持っている「眼」で、実践を切り取り、意味づけしていく作業が、ビデオの撮影と編集なのである。教員養成の過程でこうしたボランティアによる「体験学習」と、各種メディアを利用した実践記録の作成とを並行させることは、様々な条件（教育実践そのものへのボランティアとしての参加、各種メディアを利用するための大学での学習環境の整備、そして実践

づくりのための十分な時間)があってはじめて可能となるが、それは、撮影・編集のプロとしての「仕事」ではなく、教師としての力量形成の一つのステップである。

加えて、ビデオを用いることによる「授業リフレクション研究」⁹⁾や Stimulated Recall¹⁰⁾の手法は、リアルタイム性(あるいは「客観性」)では限界を持ちながらも、実践者の思考(あるいは主観的な「信念」をも)を、共有可能なことばや論理で記述することを目指している。ボランティア参加者による事後のビデオ視聴は、直接には必ずしも自分たちの行った活動の「分析」を目的とするものではないけれども、そこで展開される「意見交換」や「反省」は、まさしく教師の思考・論理や内面を明らかにしようとする研究の対象なのである。そして、ゼミナールでのビデオを用いた話し合いも、教育実践そのものへの参加を意識する学生ボランティアの活動を基盤としているから、教員養成の過程で「ほんもの」を追究する姿勢と重なることになる。

学生ボランティア参加者にとって、作成したビデオが自分たちの活動記録としての意義を持ち、そしてそれ以上にその制作過程が実践づくりの一環として重要な役割を果たしたことがわかる。

第二に、ボランティア活動参加者以外にとっての参考資料的な意義があげられる。映像資料が、各種学会・研究会等において効果的なプレゼンテーションの手段と成り得ることは当然である。これは、同様の実践を行おうとする者や、学生ボランティアの活用による実践(あるいは学生ボランティアそのもの)を分析の対象とする研究者にとっての実践資料の提供となる。

資料的価値として考えるとき、通常は未編集の撮影あるいは録音テープが第一次資料に相当するのに対して、実践に深く参与した者の手による撮影・編集ビデオは、上述の通り、制作の過程そのものが実践と不可分なので、プレゼンテーション用ビデオもまた、圧縮された第一次資料としての意味を持つ。これを学校との共同研究として行えるのも、教員養成の過程として「教師としての眼」を持ちつつある者だからこそ可能なことである。

また学生は、ボランティア活動の一環としてビデオ作成に携わることにより、資料としての映像制作のノウハウを身につけ、プレゼンテーション能力の向上を図ることができる。一例をあげれば、こうした研究・実践活動の成果を活かして、卒業論文の主要な添付資料として映像作品を用いる者もいる。

さらには、教育実践に限らず、自分(たち)の考えを他者と共有していくための能力を育て、学生生活の充実に意味ある活動を生み出すことになる。その一つの応用例が、自分たちの大学生活を切り取って、後輩たち(あるいはそうならうとしている受験者)に紹介するための「教育学部紹介ビデオ」の撮影・編集である。学校での学生ボランティアの範囲を超えて、学生が自分たちの手で大学生活を創造する可能性をここに見ることができる。

②学生ボランティアの活動としてのビデオ撮影の留意点

以上のような意義を認めた上で、学生ボランティアの活動中にビデオ制作を取り入れるには、次のような留意すべき点が存在する。

学生ボランティアにおけるビデオ制作の実施にあたって最も留意しなければならないことは、制作に当たる者たちが、ビデオ制作はあくまでも「手段」であって「目的」ではないという意識を忘れないことである。「ビデオ制作班」を担当するからといっても、学生ボランティアにおいては、プロの映像業者のように終止撮影のみに専念しているのではないし、またそれは望ましい姿ではない。むしろその逆で、撮影者は、撮影行為そのものより、子どもとのコミュニケーションの方にこそ重

きを置かなければならない。学生ボランティアが目標とするものは、子どもの学習活動の支援であり、学生自身の教育者の意識の育成である。そしてその原則は、ビデオ制作においても例外ではない。こうした意識があるからこそ、上述のような、ビデオ制作を通じた実践的フィードバックが可能となり、また良質な第一次資料としての実践記録ビデオが編集できるのである。

実践そのもの、そしてボランティア活動と不離一体のものとしてビデオ制作を考えていることが、ここでの取り組みの特徴であるともいえよう。

③ビデオ撮影の実際

続いて、今回の平磯小学校での実践におけるビデオ制作を、撮影・編集のそれぞれの段階に分けて考えていきたい。

まず、撮影の段階として、事前協議の重要性がある。今回の活動は規模が大きく、子どもたちが分散して移動する場面もあるだけに、全ての子どもたちを記録するためには、一人の学生がいくつもの場所を撮影せねばならない状況にあった。そのため、ビデオ制作班も、活動が当日の撮影だけに限定されるのではなく、実践の全体を意識する必要があり、当初から情報の共有を目的としたミーティングに参加した。その後、撮影の準備段階としての制作班としての話し合いの場を持ち、活動の全体像を把握することで、ビデオの完成図を作成していったのである。これにより、どのような映像が必要かを予想し、適切な場所に人員を配置することができるようになった。

最も広範囲に撮影場所が拡散し、有機的に変化したのは目的地までの移動時であった。その撮影ポイントは、出発、学生ボランティアとの合流、見学、移動、到着の5点であった。到着以外のポイントは、子どもたちが全員通過するわけではなく、見学場所も子どもたちのグループごとに異なる。このため、事前に話し合った結果、総勢4名の制作班に加えて、グループを引率する学生の何名かにも、一部とはいえカメラを持ってもらうことになった。

制作班としては、出発を一名が撮り、その他は合流地点である水戸駅と赤塚駅で待機した。撮り終わったら、そのまま見学場所まで先回りし、いくつかの見学場所を一人が掛け持ちして記録し、自分の担当の見学場所撮影が終わった者から、子どもたちの通過点、目的地に移り、定点で移動、到着する子どもたちの姿を撮影するという形をとった。

事前のミーティングで十分な準備ができていたため、実際には定時以外連絡を取り合う必要もなく、撮影は非常にスムーズに進めることができた。反省点としては、撮影禁止の見学場所を事前に把握していなかったために、内部を見学する子どもたちの姿を撮影することができなかったことがあげられる。今後同様の活動の際には留意すべきであろう。

また撮影技法の共有でも、事前準備の場面から実践にかかわっていたことが有益であった。宿泊学習の事前指導を撮影するためにカメラを持ち込むことができ、その映像記録を再生しながら各種撮影技法についての議論を交わすことができたことは、不慣れなメンバーにとっても恰好の練習の機会を提供した。

三脚の使用や、それが無い場合の手ぶれ防止策としての安定姿勢など一般的な技巧以外にも、子どもたちを撮影する際に特有の、子どもたちの目の高さで撮るアングルや、意識されにくい撮影場所の選定などの情報交換が行われた。撮影内容についても、状況説明的に、場所の映像、子どもたちがこちらに向かってくる映像、目の前で活動している映像、こちらから離れていく映像の順番で撮るように徹底された。完成された状態でのビデオをイメージしているからこそ、撮影・編集の経

験がある参加者と初心者との間の共同作業がスムーズに行われた。これも、失敗の許されないプロの作業ではなく、活動の間に「育っていく」ことの許される学生ボランティアだからこそその経験かもしれない。

さらに事前指導の撮影が、子どもたちの中でのカメラを意識する気持ちを薄れさせ、カメラ慣れさせたことも指摘できる。ややもすれば子どもたちがカメラを意識して不自然な行動をとり、他校での実践ビデオでは、これに悩まされたことも多いが、今回はかなり自然体を記録することができた。この「カメラ慣れ」についても、事前の協議の中で提案され、実際に成果をあげた点の一つである。また、移動のない場面でも、営火での撮影場所の割り振りなどでは、事前のミーティングが役立ち、撮影の成功につながっている。

④ビデオ編集

続いて事後の編集段階についてである。編集作業は、すでに撮影された素材を加工することであるが、多人数で分担しつつ編集作業を行う際には、一貫したテーマが非常に重要になってくる。これは、活動の規模、撮影したテープの量を考えるとき、一人での作業では物理的に無理である一方で、単に各人が自分の好みでカットをつなぎ合わせていたのでは、素材を活かして限られたテープの時間にまとめあげることが不可能だからである。

これまでのボランティア活動の撮影・編集では、学生のみを振り返りを目的としたものが多かった。しかし今回は、実験的に対象を子どもたちを中心に設定して編集作業を行った。それは、子どもたちが自分達の学習を振り返るためのものには、必然的に学生も自分達の活動を振り返り実践的フィードバックを行い、子どもたちの成長を見て取ることができるものが含まれていると考えたからである。

このため、学生向けに編集したビデオよりも、子どもたちと学生のかかわりというカットは減少し、多くの漢字が使えないことでテロップが長くなるなどの問題も生じた。しかし、より子どもたちに近い形で、その成長を実感することができる作品になったことも確かである。

その過程では主に次の3点に留意した。

①活動プログラムの踏襲—プログラムに添った形で時間的に順列にカットを配置した。こうすることにより、振り返りのイメージが明確になるようになったのである。

②できるだけ参加した全員が写るような配慮—これは単純に不公平感をなくすという以上に、自分が活動していた時の他者の活動が一目でわかるようになり、子どもたち、学生、共に相互理解が深まったと思われる。特に学生間では、ボランティアでの子どもたちとの関わりで他者から学ぶことも多いため、そういった点では非常に役立ったようである。

③テロップと音楽の配置への配慮—今回は実験的にテロップの字体や大きさ、色遣いを大胆に変えて設定した。実際に撮影者がテロップを作成することで、その場の気分も表現すると共に、映像とテロップが相殺しあわないよう注意を払った。音楽については、全員を写すために短いカットが続き、台詞が判然としない部分が多いため、その場の空気を表現する手段として議論を重ねつつ使用した。

このように、簡単に大学の研究室で編集作業を行えるのは、デジタルビデオで撮影した素材をパソコンに取り込んで編集し、デジタルビデオに書き戻すというノンリニア編集が小規模な設備でも可能になったからである。比較的高い性能の機材が必要となるとはいえ、素材が劣化しにくく、や

り直しがきくというのが、この編集技術の特徴である。

なお、今回のビデオ制作では以下の機材を使用した。

デジタルビデオカメラ…	(SONY TRV - 900・PC - 100・PC - 7・PC - 1)
パソコン……………	(Gateway G6 - 400)
	スペック…CPU 400MHz メモリ 266MB HDD 21GB
ビデオデッキ……………	(SONY WV - D700)
編集ソフト……………	(Ulead MediaStudioPro6.0)
画像取り込み用ソフト…	(CANOPUS DVRaptor)

以上、学生ボランティアにとってのビデオ制作の意義、撮影上の留意点、撮影と編集の実際について検討してきた。それは、自分たちの活動の質を高め、また他者と共有していくための方法であり、ボランティアの活動と不可分な「記録づくり」として位置づけることができるのである。

おわりに

①学生ボランティア活用による教育実践の改善からの示唆

本稿では、学校教育における特別活動の一環としての学生ボランティアの活用を検討してきたが、学生ボランティアは、今後すべての小・中学校、高校で導入される「総合的な学習の時間」の実施にあたって、教員志望の学生あるいはそれに類する地域人材の活用の意義と可能性を示唆している。

地域人材の活用にあたっては、例えば人材バンクの作成とその活用が進められているが、それには学校側の膨大な労力を必要とし、また、地域によっては協力者が少なかったり、特定の者への偏りが出たり等の問題が予想される。学生ボランティアの活用は、こうした地域の「自前」の人材バンクを補完するものとして、大きな役割を担うことが可能である。その意味では、教員免許法の改正で新規に導入された「総合演習」での学習活動の一環として、大学が組織的に学生ボランティアの派遣を考えていく必要も生じる。大学と連携することによって、地域の学校は自動的に、活用しやすい人材バンクを手にする事ができる¹¹⁾。

また、大学で学ぶ者は、すでに職業に就いているプロとしての専門性には及ばない（あるいは職業そのものの経験はない）ものの、一定の水準と意欲を持っている。これは、条件によっては様々な知識や技術の提供者として学生を活用できることを示している。特に、出身地の違い（地域の暮らし、自然などの授業補助、あるいは留学生との国際理解教育）、趣味・特技（例えば、スポーツ、芸術、手話等）等で必要とされる場合は、通常の人材と学生とは全く変わりが無い。

さらに、教員志望者が学校でボランティアを行う場合は、その強い教職志向ゆえに、教師としての視野や立場、あるいは子ども観・教育観を、学校側が共有しやすいというメリットがある。これは、「教育の専門家」としての判断や行動が可能であることを意味しており、単に職業的な、あるいは知識や技能の点での専門性で補完することとは異なる。場合によっては、教師は実践を補助する自分の「分身」を手に入れることすらできる。平磯小の場合は、それにかなり成功しており、こ

れは、教育学部の学生をボランティアとして活用する際の、学校にとっての最大のメリットである（もちろん学生にとっても、自分の「分身」であることを教師から要求されるのは、実践の生身の部分に深く触れることになり、得るものも大きいはずである）。

なお、学校によって比較的近隣に大学等が存在しない場合、いくつかの代替策が考えられる。

一つは、地域の教員免許所有者に対して、その専門性を活かしたボランティアに参加してほしいと呼びかけることである。もし、こうした実践が可能になり、定着すれば、それは、「教員」免許を、教職という職業に就くためのライセンスという位置づけから、上述の「教育の専門家」としての証明、という位置づけに変えていくことにつながる。これは、単に「次善の策」としての意味だけではなく、むしろ積極的に今後の教師教育の課題として位置づけるべき課題だと考える。

またもう一つは、小学校では中学校・高校との、中学校では高校との、実践の連携の中で、上級学校の子どもがボランティアを行う場として、小学校や中学校を位置づけることである。それは、ボランティアを派遣してもらう場面として「総合的な学習の時間」ばかりではなく、例えば中学生が小学校で算数の授業を手伝ったり、高校生が部活動の指導を手伝ったりするというような形でも可能であろう（この場合、上級学校の生徒のボランティア活動は「総合的な学習の時間」の一環として行われる）。これは、かなり広い意味での異校種、異教科のチームティーチングでもあり、発想としては、上と同様「次善の策」ではなく、積極的な実践の改善方策として可能だと考える。

②大学教育実践としての学生ボランティアの意味

以上、学生ボランティアの活用による学校教育の改善の一つの事例として、ひたちなか市立平磯小学校の宿泊学習を取り上げ、その事前準備から当日の活動、さらに記録ビデオの制作の過程を検討してきた。他の学校でも実践・共同研究に取り組んできた中で、ここでの活動を取り上げた理由は、規模の大きさや継続性から、学生ボランティアの活用が、実践研究・教員養成の両側面で大きな成果をあげる可能性を示せると判断したからである。実際、本稿が、大学の研究者、大学での派遣研修を経た学校教員、卒業生、大学院生、学部生の共同研究としてまとめられたことが、その成果そのものでもある。

これまで5年間にわたって、地域の公立学校との共同研究の一環として学生ボランティアの派遣を行ってきた。大学改革の中で、教育学部の改組、教育職員免許法の改正が行われた5年間であったが、それは同時に、こうしたささやかな試みを可能とする条件整備の時期でもあった。私たちは、教師としての知の獲得を放棄して「体験」に逃げ込んでいるのではないし、新しいもの好きで「情報」を振り回しているのでもない。いかなるレベルであれ教育実践への参加と、その成果の共有を意識しているからこそ、自らの体験を大切に、表現し、結び合っていこうとしているのである。

教育実践、そして教員養成、それぞれがともに現在大きな困難を抱えている。ややもすれば、単に目先を変えただけの「改革」に終始してしまいがちな現実は否定できない。教育の専門家としての教師・研究者、そしてそれらに育っていこうとする者たちは、何をよりどころに、どこに向かっていけばよいのか。その答えの一つが、教育実践と教員養成とを直結させる学生ボランティアだったともいえる。教育が学習者主体のものであるなら、教師は子どもたちの声に耳を傾け、教育研究者は実践にあたる教師の、そして大学で学ぶ学生の、それぞれの発達要求に応えようとしなければならない。子どものための教育実践、教師のための教育研究、そして学生のための大学を、各々の立場で創造し続けていくことが、いま求められている。

もちろん、学生ボランティアは「万能薬」ではない。また、教育（学）研究がこうしたプラグマティックな手法のみで正当化されることも誤りである。しかし、学生が自らの学びをつくれぬ大学で、あるいは、それだけでは現実の教育に対して適切な示唆を提示できない「研究」で、自らの責任（アカウントビリティ）が果たされることはないであろう。

教育学部がいまできる地域貢献、学生支援には多様な立場で、様々なチャンネルがありうる。それには、専門的な研究成果の対外的な還元や、附属学校との共同研究がある。そして、本稿で紹介・検討した学生ボランティアもその一つの姿と考えられる。それは、「ほんもの」の教育との出会いの場を設定し、現実を変え、その実感を確認するものであり、地域の教育実践の改善と良質な教員養成にとって、着実にやがて大きな成果を生む土壌を耕していったことは事実である。よりよい教育実践と学生生活のためのこの試みが、地域の教育と大学の改善に寄与できるまで、ゆっくりとたくましく育って行ってほしいと切に願うものである。

（本稿の執筆分担は、「はじめに」及び「おわりに」が新井，1.が小野瀬，2.が柏・中原，3.が入江・金子，4.飯村・石川であり，全体を新井が校閲した。）

注

- 1) 新井孝喜「総合的学習のためのティーム・ティーチングと外部人材の活用」（吉崎静夫編『総合的学習の授業づくり』，ぎょうせい，1999，pp.35-50）や，茨城大学教育学部附属中学校『総合学習と教育課程経営』（東洋館，2000）は，学校との共同研究の成果であると同時に，関連する内容を扱う講義等のテキストとして使用された。
- 2) このことを直接意識した講義としては，平成10・11年度の「教養特別講義プログラム推進経費」によるシンポジウムの開催（茨城大学教育学部教育学教室 代表：田代尚弘『平成10年度（1998）教養特別講義推進経費報告書 人間文化論（教育問題の研究）』1999，及び同『平成11年度（1999）教養特別講義推進経費報告書 人間文化論（教育問題の研究）』2000，を参照），また，平成11年度から新規開講の教育学部1年生向け必修科目「教育実践と教師」（茨城大学教育実践研究会 代表：新井孝喜『平成10～11年度（1998～1999）教職課程における教育内容・方法の開発研究事業報告書』2000，を参照）等がある。
- 3) 茨城大学教育学部附属教育実践研究指導センター『平成9年度 茨城大学教育学部 フレンドシップ事業-実践的指導力の基礎の育成-実践資料集』1998，及び同『平成10年度 茨城大学教育学部 フレンドシップ事業報告書-指針づくり資料集-』1999，を参照。また，教員養成にとっての学生ボランティアの意義については，新井孝喜・戸塚茂則「学校教育実践と教師教育の連携への大学授業改善-ティームティーチングの授業における学生ボランティアの活用事例を中心に-」（日本教育方法学会第33回大会自由研究発表資料，1997），及び新井孝喜「学生ボランティアの活用による生活科のティームティーチング」（日本生活科教育学会課題研究発表資料，1998）で考察を加えている。なお，両者は口頭での研究発表であるが，発表資料は前出『平成10年度 茨城大学教育学部 フレンドシップ事業報告書-指針づくり資料集-』に掲載されている。
- 4) 小野瀬善行・入江宣文・新井孝喜「ホームページ利用による学生ボランティア支援システムの開発研究」，『日本教育工学会研究報告集』JET99-3，1999，pp.39-45。
- 5) 飯村大輔・石川雄士「教育学部紹介ビデオの編集（平成12年度入学者向け）」，茨城大学『平成11年度（1999）教育改善推進費（学長裁量経費）報告書 教育学部における補習教育及び校外学習（インターンシップ，ボランティア活動等）を軸とする総合的な学生支援プログラム（人権，セクハラ等への対策を

含む)の作成とFDの推進』研究代表者：菊池龍三郎，2000，pp.53-55。

- 6) 新井孝喜「茨城大学教育学部における『学校教育教員養成課程』のカリキュラム改革-『総合的カリキュラム』の編成による『小中統合』の試み-」(日本教育大学協会『平成9年度日本教育大学協会研究集会発表論文・全体討議要旨』1998，pp.105-108)，同「大学・学部と附属学校との共同研究について-茨城大学教育学部-」(日本教育大学協会『会報』第79号，1999，pp.3-4)，及び新井孝喜「茨城大学教育学部における教員養成カリキュラムの改革」(茨城大学教師教育カリキュラム研究会代表：菊池龍三郎『平成10~11年度(1998~1999)教職課程における教育内容・方法の開発研究事業報告書』2000，pp.5-10)，を参照。
- 7) このボランティア活動は，新聞でも紹介され，一定の社会的認知がされてきたことがうかがえる。金子清「学生ボランティア教師と共通の価値観」、『茨城新聞』2000年8月7日(「教師の広場」)，及び「学生が勉強お手伝い小中学校へボランティア」、『茨城新聞』2000年8月27日を参照。
なお，今回の平磯小学校での宿泊学習のボランティアに参加した学生は以下の通りである。中原正人(大学院教育学研究科1年次)，七字美智江(特殊教育特別専攻科1年次)，森川聖子(同)，飯村大輔(教育学部学校教育教員養成課程国語コース4年次)，石川雄士(同)，小林桂子(同)，山本雅美(同)，小林傑(同2年次)，高村祥(同)，柏佑美(同体育コース4年次)，糸満幸子(同数学コース2年次)，石塚香織(同)，松下剛明(同)，柳瀬由紀(同)。
- 8) 川嶋浩『写真集 未来誕生』，初版1960，一莖書房復刻。
- 9) 澤本和子「授業リフレクション研究のすすめ」(浅田匡他編著『成長する教師』，金子書房，1998，pp.212-226)。
- 10) 新井孝喜「個別指導場面における授業分析手法の開発」、『日本教育工学雑誌』18(3/4)，1995，pp.199-207。
- 11) 市町村単位，あるいは中学校校区として共有できる人材バンクの作成は急務である。これは，インターネットを通じて各学校や組織がアクセス可能な状態であることが望ましい。大学で作成される「学生ボランティア人材バンク」も同様に，インターネット上で検索可能なものとして公開されれば，地域の学校は容易にボランティアの確保ができるであろう。さらに，大学での教員養成として考えるとき，こうしたインターネット上の人材バンクの作成そのものが情報教育の内容となりうる。本研究でのHPの作成と運用は，その可能性を持っている。なお，さらに大規模に，「総合的な学習の時間」のための教材提供も意識した「教育情報データベース」を構築することも考えられる。この点では，茨城大学教育学部理科教育研究室の「那珂川ネット」の試みは高く評価される。研究代表者・小川正賢『「地域」の教育力を生かす総合的学習-河川流域の自然・風土・文化の野外博物館化-』平成9~11年度文部省科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書，2000，を参照。また，森口昌紀『「総合的な学習の時間」に関する教師用資料・教材集の作成-那珂川の氾濫を題材として-』(平成10年度茨城大学教育学部卒業研究)は，学生ボランティアに参加していた学生が取り組んだ，「総合的な学習の時間」の教材をインターネットで共有しようとする試みの一つである。

謝辞：ボランティア活動に際しては，平磯小学校の関係の皆様にご多大なお世話になった。この場を借りてお礼申し上げたい。

なお，本研究は平成12年度茨城大学教育改善推進費(学長裁量経費)によるプロジェクト研究「学部・附属学校園の連携によるバーチャル・サテライト・スクールを活用した総合的な大学公開・地域貢献(公開講座・現職教員研修)プログラムの開発と点検評価」の一環として行われたものである。